様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：７２８１０
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０４０１０３８
研究課題名（和文）ヤッスホユック（トルコ共和国）の発掘調査−古代アナトリアの都市と交易路の解明
研究課題名（英文） Excavations at Yassıhöyük in Turkey − Researches on A City State and the Trade Routes in the Ancient Anatolia

研究代表者
大村　正子（OMURA MASAKO）
（財）中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号：80370196

研究成果の概要（和文）： ヤッスホユック発掘調査の成果として次の２点が特筆される。①第Ｉ層下部に検出された前期・中期鉄器時代の建築層は、ヒエログリフ付鉛製文書片の出土と共に、 後期ヒッタイトの都市の存在を期待させるものである。②プラン、規模、設備、保存状態から中央アナトリアでは前例のない第Ⅱ層出土の王宮址は、前期・中期青銅器時代の中央アナトリアにおける都市国家の存在とその東南アナトリアおよびメソポタミアとの交流を考古学的に実証するものである。

研究成果の概要（英文）： There are two important results of the excavations at Yassıhöyük ① The architectural layers excavated in the lower layers of the Stratum I, which belong to the Middle and the Early Iron Ages, together with the small piece of lead document inscribed in hieroglyphics, allows us to expect that there was a city during the Late Hittite period. ② The remains of palace unearthed in the Stratum II are unprecedented in the Central Anatolia in terms of their plans, scales, installations and well-preserved conditions. Archaeologically, they prove the existence of a city-state in the Early and the Middle Bronze Ages in the Central Anatolia and its interrelation between Mesopotamia and the Southeast Anatolia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
２００９年度	3,000,000	900,000	3,900,000
２０１０年度	2,900,000	870,000	3,770,000
２０１１年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総　計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：考古学、アナトリア、ヤッスホユック、古アッシリア、交易路

１．研究開始当初の背景

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の大村幸弘は 1985 年以来、カマン・カレホユック遺跡における発掘調査を通して、幾つかの問題提起と共に、日本の研究者としては初めて世界史の中に位置づけうる中央アナトリアの古代編年の再構築に寄与してきた。また、同時に同研究所は中央アナトリアの考古学的一般調査を継続してきており、1400 余りの遺跡踏査を行ってきた。カマン・カレホユック発掘調査による編年を縦軸とし、遺跡踏査によるそれぞれの時代の文化の広がりを確認する中で、紀元前 3 千年紀末から 2 千年紀初頭にかけてのより強力な都

市国家の存在が示唆され、その発見と集中的な調査研究が期待される様になった。ヤッスホユックはその期待に応える遺跡として調査が望まれていた。

２．研究の目的

（１）　表採調査で堆積が推定された文化を層位学的に明確にする。

（２）　紀元前３千年紀末から１千年紀にかけて、中央アナトリアと東南アナトリアおよびメソポタミアとの交易ルート上に存在したと考えられる一つの都市の構造を明らかにし、古代アナトリアにおける都市国家の形成について検証する。

特に、紀元前３千年紀末から２千年紀初頭に活発化するメソポタミア、シリアとの交流や、アッシリア商人の到来に起因する遠隔地交易とアナトリアの域内交易の発展に対応できる都市国家が、当時のアナトリアに既に存在したことを証明する。

３．研究の方法

本研究は、調査地：トルコ共和国クルシェヒル県チャイアウズ町ヤッスホユック遺跡（トルコ共和国の首都アンカラから南東約160km、クルシェヒル県の県庁所在地クルシェヒル市から約25kmの国道沿いに位置する）における発掘調査を基本とする。ヤッスホユック遺跡における発掘調査は、少なくとも30年を要するものと考えられるが、その調査の第一段階として、2007年に行なわれた予備調査を踏まえ，磁気探査によって検出された遺跡中央部の大遺構の発掘調査を開始する。発掘調査と平行して，地中探査の継続、出土遺物の分析を行なう。また，遺跡の地理学的立地条件を調査する。

一般的に，遺丘では複数の文化層が重層している。このため，発掘調査では目的の文化層、遺構を即座に調査することができない可能性は多大である。しかし，考古学的発掘調査の基本である、埋蔵されているすべての文化層を丁寧に調査し，その前後関係の中で、紀元前１千年紀､および２千年紀の都市形態、文化が正確に捉えられるものと考えている。

文化層の把握においては、カマン･カレホユック発掘調査によって再構築された中央アナトリアの編年を確かな軸として使用することができる。この編年を縦軸としてヤッスホユックにおける紀元前２千年紀、１千年紀の都市形態とその文化を明らかにしていく。

発掘調査そのものは以下の手順で行われた。

（１）　遺丘中央部で発掘調査を行い、堆積文化を層位学的に確認し、ヤッスホユックの編年を作る。

（２）　磁気探査で検出された大遺構を発掘調査し、その年代付けを行う。

（３）　磁気およびレーダー探査を継続し、遺跡の概形をより正確に把握する。

４．研究成果

ヤッスホユックにおける発掘調査は、2008年度には予備調査を継続し、2009年に本格的な調査を開始した。2011年までの４年間で遺丘中央部の８グリッド（1グリッドは10mx10m）で調査を進め、第Ⅰ層：鉄器時代、第Ⅱ層：前期・中期青銅器時代の２文化層を確認した。

（１）第Ⅰ層:　鉄器時代

相互関係が明瞭でなく新旧つけがたい幾つかの遺構が含まれているため、最終的な建築層の決定には至っていないが、 少なくとも７建築層に属する建築遺構を検出している。上から６建築層は後期鉄器時代に、現地点では最も古い第７建築層は中期もしくは前期鉄器時代に属すると考えられる。

第Ⅰ層の発掘調査の結果で主要なポイントは２点ある。その一つは、①後期鉄器時代の大遺構（第３建築層）の存在、今一つは、②中期-前期鉄器時代もしくは後期ヒッタイト時代の層の存在である。

①この建造物は遺丘中央部に設けられたかなり大規模なものであったと見られるが、その後の第２、第１建築層の掘込み式建造物により、また、現代の耕作、採石等によっても、かなり壊されてしまっており、残念ながら礎石部分しか残っておらず、上部構造はほとんど確認されていない。 第２、第１建築層の建物は、概ね掘込み式の一部屋形式の建物で、特に、第２建築層の個々に独立した一部屋形式の掘込み式建物は、この第３建築層の大遺構を、部分的に壊し、また、その壁を部分的に利用して建てられていたようである。また、明確な床面も検出できず、床面も

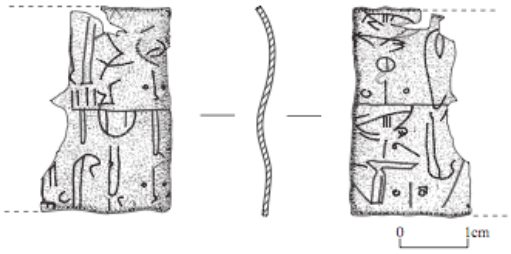
しくは生活面は、残存する炉床や敷石の断片から推定するばかりである。しかし、その礎石は、入念な作りで、わずかに残存していた壁上部よりも約 30cm 広く 130cm 余りの幅で、下層の影響による土面の状況によるが、深いところでは１m 以上も溝を掘込んで、入念に石を詰め込み、その上に石壁が構成されていた様である。壁によっては、巨大な石を最下層並べ、その上に 40-50cm 大の石を詰め、さらに小石を詰めて、平衡をとり、礎石を作り上げている場所もある。

このような堅牢な礎石をもつことから、かなりの高さと規模をもつ建物であったろうと想像される。この第１～３建築層の遺構はその出土遺物から、後期鉄器時代の後半、紀元前５～４世紀に年代付けられる。遺丘周縁部の壁と考えあわせて、当時、ここに大きな都市が存在したと推定される。中央アナトリアでは、特にクズルウルマックの東側では後期鉄器時代のこのような大規模な都市は発掘されておらず、今後の調査研究を継続することにより、より正確な年代決定を行い、アケメネス朝ペルシャ、リキュア等との関連づけとともに、当時の中央アナトリアの位置づけを可能にする足がかりを得たと考えている。

②第３建築層の大遺構を取り外した後、やはり後期鉄器時代に年代付けられる第 4～6 建築層の遺構が検出された。E8/f10 グリッド内の遺構 R29 はその一つであるが、この R29 により壊されている大きなピット P34 が検出された。このピットは、第Ⅱ層の煉瓦壁 W58 を大きく破壊しているが、シルエット描写の鹿文や同心円文が特徴的なアリシャルⅣ式土器やカマン・カレホユックの第Ⅱc 層の土器に類似した土器片が多く出土していることから、中期鉄器時代に年代付けられる。

また、E8/d10 グリッドで第３建築層の W57 の下に検出されたピット P41 と P41 に壊されている石壁 W78 からなる遺構 R33 も、中期もしくは前期鉄器時代に年代付けられる。この P41 から出土した大量の土器片の多くは、カマン・カレホユック第Ⅱc 層の土器に類似し、カマン・カレホユック第Ⅱd 層の土器に類似した土器片も幾つか観察された。従って、P41 および R33 は中期もしくは前期鉄器時代に年代付けられる。

2010 年度の調査で、鉛製ヒエログリフ文書

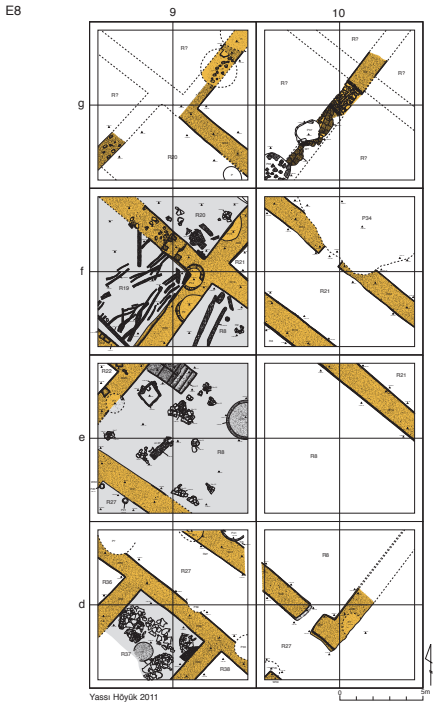


の小片が撹乱層からではあるが出土している。これは、発掘調査開始前に、地元の人が発見し、アンカラの博物館へ持ち込んだとされる、紀元前８世紀後半の後期ヒッタイトのヒエログリフによる手紙文書、もしくは同類の文書の断片と考えられる。この鉛製文書片の出土と二つのピット P41 と P34 から中期-前期鉄器時代の土器片が数多く検出されたことと合わせて、ヤッスホユックに中期-前期鉄器時代のひいては後期ヒッタイト時代の都市が存在した可能性が高くなった。後期ヒッタイトに関係付けられる碑文は中央アナトリア南部で検出されているが、都市遺跡は発見されておらず、クズルウルマックの内側（東側）では、ヒッタイトの本拠地であったにもかかわらず、後期ヒッタイト時代には碑文さえも今までのところ発見されていない。

（２）第Ⅱ層:　中期・前期青銅器時代

第Ⅱ層に関する調査は、2009 年には、E8/f9 グリッド内の限られた範囲で発掘し、磁気探査で検出された遺構が第Ⅱ層の日乾煉瓦からなる大遺構であり、この煉瓦壁が２m 余りの高さで残存していることを確認し、以後の発掘調査の方向を定めることができた。2010 年の調査では E8/f9 グリッドでＲ8、Ｒ19、Ｒ20 の調査を進め、このグリッド内で R8、R20 の床面を確認した。2011 年には第Ⅱ層の焼土層に属する建築遺構のプランを全８グリッドで明確に確認することを目標として調査を進めた。その結果、この建築遺構が北西-南東方向の軸をもち、コートヤード／中庭もしくは謁見の間と見られる R8 を中心に、廊下や各部屋がまさしく左右対称に配置された大 遺構であることが明確になった。この建物は、その規模からも決して単なる住居ではなく、またアシュルやテルアスマルの宮殿址にも似たプランをもち、王宮址もしくはそれに類する公共の建造物の遺構

であると考えられる。この遺構内部の発掘調査は、まだその一部を行ったに過ぎないが、現在までに以下のような結果が得られた。



①R8 はこの建造物のほぼ中央に位置し、縦 21.5m、幅 15.25m の広い空間で、コートヤード／中庭もしくは謁見の間であったと考えラル。２m を超える高さで保存されていた北西壁 W20 の中央部には、３段のステップがついた壇が設けられ、この壇には上面にも側面にも丁寧に化粧土と漆喰が塗られていた。また、部屋の中央部には直径 240cm の円形の炉があり、この炉の側面にも漆喰が塗られていた。正面入り口は未だ発掘されていないが、R8 の南側の廊下 R27 と繋がる出入口がこの二つの部屋を仕切る壁 W47 に検出された。R8 の床面上には、12 個体以上の大型の土器が壊れた状態ではあるが、現位置で発見された。

②廊下状の R27 を挟んで R8 の南西側には、やや小さな三つの部屋 R36、R37、R38 が並んでいる。このうち R37 の E8/d9 グリッド

内の部分を床面まで掘り下げた。R37 は貯蔵室と思われ、大きな甕が壊れてはいるが、原位置で検出された。また、部屋の中央部には、R8 のものよりも小さいが、同じ作りの円形の炉が残されている。

③R8 と R21 を挟んで北側には、R36、R37 と対応する部屋が、Ⅰ層の建物とピットに大きく壊されてはいるが存在する。

④ R8 と壁 W20 を共有する部屋も現在のところ三つ R20、R19、R22 が確認されている。これらの部屋の内部には、建材であったと思われる炭化材が多く堆積していたが、特に R19 では非常に多く、炭化木材が部屋の３分の２を埋めていた。

（３）年代決定における問題提起

この王宮址とも見られる大遺構の年代付けにあたって、紀元前 3 千年紀から 2 千年紀かけての土器編年の再考、従来の前期青銅器時代の終了時期と中期青銅器時代の開始時期の再考、を促すこととなった。なぜならば、

この建物から出土している遺物として、従来、紀元前２千年紀初頭の中期青銅器時代に年代付けられていたものと、紀元前３千年紀後半の前期青銅器時代に年代付けられているものが混在しているからである。例えば、 胎土に多くの植物繊維が混じり、赤色または赤橙色のスリップがかかったハンドメイドの土器や『インターミディエイト土器』と呼ば

れている前期青銅器時代に位置づけられている遺物と共に、 従来、紀元前 2 千年紀初頭の中期青銅器時代に年代付けられているろくろ製赤色磨研土器や、 紀元前 2 千年紀

第１四半期のアッシリア商業植民地時代の遺物として最も典型的な青銅製スタンプ形印章やスタンプ形印章が押印された封泥片も出土している。さらに年代決定を迷わせる

ものが、R8 の床面上で確認された炉と、五徳もしくは器台と思われる把手付の一組の土製品である。この器台の類似品が、キリセテペというタウルス山脈の麓にある遺跡では前期青銅器時代の遺構から発見されている。一方、部屋中央の漆喰で縁取りされた円形の炉は、キリセテペでは中期青銅器時代の遺構から検出されたと報告されている。ところが、ヤッスホユックでは、どちらも同一の遺構 R8 の床面上で出土している。

考古学的には、新しいものと古いものが混在していれば、その遺構を新しい方に年代付けるのが一般的であり、このヤッスホユック第Ⅱ層の大遺構も少なくとも紀元前２千年紀初頭に年代付けたいところである。しかし、R8 で採取した炭化材は、その C14 年代測定によると 2261-2202 B.C. という年代がだされている（名古屋大学年代測定総合研究センター大森貴之）。この新旧遺物の混在、推定していたよりも古い C14 年代測定値を、どう解釈し、王宮址もしくはそれに準じる公共建造物であったと推測されるヤッスホユックの 第Ⅱ層の大遺構の年代付けをいかにするかが、現在最も大きな課題である。

前期青銅器時代から中期青銅器時代への移行が、従来言われている様に、紀元前３千年紀末から２千年紀初頭にかけてであったのか、土器から観たとき、中期青銅器時代はそれ以前に既に始まっていたのではないだろうか、あるいは、アッシリア商業植民地時代と中期青銅器時代をパラレルに考えることは如何なものであろうか、前期青銅器時代の土器文化は、新しい技術（ろくろ製赤色磨研土器）の広がりとともに消え去ったのではなく、並行して存続していたのではないだろうか。あるいは、編年の基本である、high, middle, low の年代の選択を考え直さなくてはいけないのだろうか、等々、ヤッスホユックの今後の発掘を通して解決していかなくてはならない。しかし、ヤッスホユックに、紀元前３千年紀から２千年紀にかけて、メソポタミヤやシリアとの遠隔地交易およびアナトリア域内交易に対応しうる都市、もしくは都市国家が成立していたことは間違いないと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計４件）

① Masako Omura, “2010 Yılı Yassıhöyük Kazıları,” 33. Kazı Sonuçları Toplantısı, Ankara 2012, pp. 271-286.
② Masako Omura, “Archaeological Surveys at Yassıhöyük,” Anatolian Archaeological Studies, XVIII, Tokyo 2011, pp. 91-164.
③ Masako Omura, “2009 Yılı Yassıhöyük Kazıları,” 32. Kazı Sonuçları Toplantısı, Ankara 2011, pp. 360-367.
④ Masako Omura, “Yassıhöyük Yüzey Araştırmaları,” 26.Araştırma Sonuçları Toplantısı,

Ankara 2009, pp.27-36.

〔学会発表〕（計６件）
① 大村正子 “Excavations at Yassıhöyük 2011” 2012.05.29, ヒッタイト大学 トルコ共和国-チョルム
① 大村正子、「第２,３次ヤッスホユック発掘調査」トルコ調査報告会、2011.12.17 武蔵野スイングホール　東京都武蔵野市
② 大村正子 “Excavations at Yassıhöyük 2010” 2011.05.25, イノニュ大学 トルコ共和国-マラティヤ
③ 大村正子 “Excavations at Yassıhöyük 2009” Türk Kazı Sonuçları Toplantısı(トルコ共和国文化観光省主催考古学シンポジウム), 2010.05.26,トルコ共和国-イスタンブル
④ 大村正子「第１次ヤッスホユック発掘調査」 トルコ調査報告会、2010.04.03, （財）中近東文化センター　東京都三鷹市
⑤ 大村正子, “Archaeological Surveys at Yassıhoyük” Türk Araştırma Sonuçları Toplantısı, 2009. 05.23、パムッカレ大学 トルコ共和国-デニズリ
⑥ 大村正子、「ヤッスホユックにおける堆積文化―表採土器による推定」トルコ調査研究会、2009.03.29　(財)中近東文化センター 東京都三鷹市

〔図書〕（計　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.jiaa-kaman.org/jp/excavation_yassihoyuk.html

６．研究組織
(1)研究代表者
大村　正子（OMURA MASAKO）
（財）中近東文化センター・
アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号：80370196

(2)研究分担者
大村　幸弘（OMURA SACHIHIRO）
（財）中近東文化センター・
アナトリア考古学研究所・所長
研究者番号：10260142

松村　公仁（MATSUMURA KIMIYOSHI）
（財）中近東文化センター・
アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号：60370194

奥村晃史（OKUMURA KOUJI）
広島大学・文学部・教授
研究者番号：10291478

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：